

又云く

大寂靜故名爲大樂、涅槃之性是大寂靜何以故遠離一切憒鬧法故以大寂靜故名大涅槃(身佛土)

こ、即ち寂靜無爲は、淨土の妙境界を顯はすなり。

必以信心爲能入こは、正しく淨土往生の因を明すなり、必こは必定にして得生の因は唯信心一つに限るこをあらはす、信心こは善導の所謂二種深信なり、即ち元祖はこれを三心章に引き來り信疑決判して後に、

故今建立二種信心決定九品往生者也

こ、のたまひて、すべて淨土の往生は二種信心即ち二種深信にあるこを示す、故に以信心爲能入このたまへるものなり、所謂二種深信こは信機信法の二種にして、二種こ云へごも二心あるにあらず、信相を左右より望めて二種こすれごも、要するに行者歸命の一心なり、故に一信心こいふ、元祖の念佛爲本を以て標榜したまふこいへごも、其の念佛は必ず三心即一心を具するの念佛にして、

要は信心にあるなり、高祖の信心正心こ談じたまふもの、誠に所以ある哉、

弘經大士宗師等 極濟無邊極濁惡

以下四句は道俗を結勸するなり、中に於て前二句は七祖の傳持所爲を結し後二句は正しく結勸するなり、

弘經こは弘は弘通にして、上來述ぶるころの七祖の法義をいふ、經こは釋迦の所説にして大經又は三經を指す、但し淨土の三經には差別門こ一致門こありて、其の差別門より見るこきには、觀經小經の顯説は十九、二十願を明せるものなるが故に眞實經こいふを得ず、其の一致門より見るこきは、觀小二經の隱彰は共に、一第十八願の法門にして、大經眞實に同ずるが故に、三經並に眞實經こいふを得るなり、七祖の所説悉く此の眞實經にあるが故、弘經こいふ大士宗師等こは、大士こは龍樹天親の二菩薩を指し、宗師こは曇鸞、道綽、善導源信、源空の下、五祖に名く、化身土卷本二十に曰く

是以四依弘經大士三朝淨土宗師開眞宗念佛導濁世邪偽



ご、此の意なり、等ごは齊等の義にして、七祖等しく衆生を化導したまふことなり、文類正信偈には論說師釋共同心ごのたまへり、拯濟ごは手を以て救ふを拯ごいひ、舟を以て救ふを濟ごいふ、御差訓にはアハレムスクフごありて、彌陀攝取の御手、弘誓の御舟を以て衆生を救濟したまふをいふ、其の救濟即ち七祖の化導ごなりて顯はるゝが故に拯濟等ごいふなり。無邊ごは邊際なきの意にして、安樂集上三手に曰く

欲使前生者導彼後去者訪前連續無窮願不休止爲盡無邊生死海故

ご、生死無邊なるが故に大悲亦無邊なり、大悲無邊なるが故に、拯濟亦無邊なり、極濁惡ごは最下劣を擧げて、以て拯濟の正機を顯はす、上に所謂五濁惡時群生海なり。要するに此の二句は七祖各々二尊の教意を受けて、五濁の群生を救濟したまふことを顯はすなり。唯七祖のみを擧げて二尊をいはざるは、弘經の經中に其意あるが故なり。

道俗時衆共同心 唯可信斯高僧說

道俗ごは道は出家にして俗は在家なり、されども末法の僧は既に無戒名字の僧にして唯名のみを存す、故に俗ご同じくして上の極濁惡の衆生なり、化身土卷本丁左以下に傳教大師の末法燈明記を引き來りて、三時の興廢を論じ、末法無戒名字の相を示し給へり、吾人豈懺愧せざるを得んや。時衆ごは高祖在世並に滅後の衆生を呼んで勸めたまふなり、これ立義分最初に

道俗時衆等 各發無上心

ごあるに習ひたまふなり。共同心ごは共は和合に名け、同心は所志別なきをいふ、心を他に馳せず、共に心を同じくして、一味の安心に住せんことを勸めたまふなり。唯可ごは唯は他に簡ぶの言にして、他師の多く淨土の法を説くありご云へごも、經の正意に順ぜず、自力の念佛を説いて眞實他力を知らず、故に他師に簡んで唯ごいふ、可は須に同じ。信ごは歸屬にして、七祖の說に歸するもの即き二尊の意に信順することなり。高祖説ごは上述するごころの七祖の法義を指す、七祖各々其の法義を發揮するごころありごいへごも、畢竟するに、



皆な經意を擴説するのみ。故に宗祖大師は此の正信偈に先づ經意を明して、次に七祖の説を述べたまふ、これ七祖の法義全く、二尊の經意より出ずることを示したまふなり、而してまた宗祖所説更に私なく、三經七祖を相承したまふにあり、寶章第一帖第一通に曰く

タ、如來ノ御代官チマウシツルバカリナリ、サラニ親鸞メツラシキ法ヲモヒロメズ、如來ノ教法ヲワレモ信ジ、ヒトニモオシヘキカシムルバカリナリ、シ、行者よろしく自己の妄計を雜へず、専ら心を一にして、狐疑猶豫するところなく、祖説に順ひ、仰いで彌陀覺王の本願を信すべし。

正信偈講義 畢

大正三年五月二十日印刷

大正三年五月二十三日發行

京都府京都市東區道修町一丁目七十一番屋敷 新波 隨性

著者兼 發行者 勝谷 攝謙

大阪市東區道修町一丁目七十一番屋敷

印刷者 關 貢 米

兵庫縣武庫郡本山村二樂莊内

發行所 一一樂莊出版部





324

409



終

